

論 文

「可能性が高い／大きい／強い」に使い分けはあるか

服 部 匡

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
教授Examining the difference among *kanoosei ga: takai, ookii, and tuyoi*

Tadasu Hattori

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

1. 目的と資料・方法

筆者は、服部(2011a)で「○○性」「○○度」などの形の語、さらに服部(2011b, c 2012a, b)でより広い範囲の語群に関して量的形容詞類との共起用例数を統計的に分析し、通時的・共時的事実を明らかにしてきた。それらの分析にあたってさしあたり無視した問題をここで取り上げ検討する。ただし、一連の研究で分析対象としたすべての語に関して論じることは困難なので、出現頻度の高い「可能性」という語を代表として分析考察する。

「○○性」という形の名詞では、その表す抽象的属性の程度の大きさを表現するのに多くの種類の形容詞が用いられる。使用頻度の高い「可能性」を例にとると(大きな値を表す形容詞類では)「高い、強い、大きい、濃厚ダ、大ダ、濃い、多い」などの用例がある。

新聞記事での事例を観察すると、全く(またはほとんど)同様の事柄を述べているのに、記事によって異なる形容詞が用いられていることさえあるのに気づく。2組の例をあげておく。

- (1) 住民らは「人骨は戦争犯罪の被害者である捕虜らの遺骨である可能性が高い。身元調査もせずに骨を焼却するのは『捕虜の待遇に関するジュネーブ条約』などの国際条約に違反している」と主張。(毎日93/8/24)
- (2) 訴状によると一九八九年七月に見つかった人骨につ

いて(1)捕虜などの遺骨である可能性が強い。身元調査せずに焼却するのは『捕虜の待遇に関するジュネーブ条約』などの国際条約違反(2)戦争犯罪の重要な証拠である可能性が高く、焼却は刑法の証拠隠滅罪にあたる——などとしている。(毎日93/09/02)

- (3) 名古屋地方気象台の二十四日の発表によると【略】一、二月も同じような傾向になり、気温、降雨量とも平年並みになる可能性が大きいという。
(朝日98/11/25)

- (4) 東海地方の四-六月の天気について、名古屋地方気象台は気温、降水量とも平年並みになる可能性が高いと予報している。(朝日98/3/20)

本稿で問題とするのは、上のような語結合のパターンで、異なる形容詞の間に何らかの意味的な使い分けがあるかどうかという点である。意味ではなくレジスター等に基づいた使用傾向の相違がある可能性も存在するが、今は扱わない。また、ここでいう使い分けとは「ある条件に合致した環境では、形容詞Aを用いることができるが形容詞Bを用いることができない」といった制約を生み出す意味的区分には限らず、「形容詞Aは、ある条件に合致した環境で用いられやすい」といった傾向的事実をも含む。結論を先取りすることになるが、前者のような強い条件は見いだせなかった。

複数の形容詞と共起する抽象的尺度的名詞の代表として

「可能性」を取り上げ、特に用例数の多い「高い・強い・大きい」の3形容詞との結合を中心に、計量的手法を用い、使い分けの有無、あるとすればその内実を探る。本稿の方法は発見的・探索的なものである。

本稿で分析に用いるデータは次の期間の新聞記事を合わせたもので、約30億字からなる。新聞記事は現代の日本語を代表するデータ（そのようなものがあるかはともかく）とは言えないが、内容にそれなりの多様性はある。量的に匹敵する現代日本語の共時的データがないこと、「可能性」という語が比較的良好に出現することを考慮して、これを用いる。プレインテキストのデータ、および、それに形態素解析プログラム MeCab (0.97) と電子辞書 UniDic (1.3.12) による形態素解析を施したものをを用いている。

朝日新聞 1988-1998年

毎日新聞 1991-2005年

読売新聞 1987-1991年、2000年-2007年

これらから、(5)に示した条件に合致した用例を抽出したデータを分析に用いる（ただし5節ではこの条件外の例も用いる）。用例の総数を形容詞別に示すと表1のようになる。

(5) 調査対象とする用例の条件

次の語類が「可能性|が・は・も・の|形容詞¹⁾」の連接をなし意味的に主述関係にあるもの。ただし、「可能性」の直前の文字が（あるとすれば）漢字・片仮名のもは除く。形容詞は諸活用形を含むが、連用形（連用中止以外）で動詞にかかるものは、その動詞が「なる」の場合に限って調査範囲に含む（「高くありません」等の否定の形は含む）。また連用中止の場合は直後が句点かひらがなのもののみ含む²⁾。

形容詞：次の2類のもの。

「大」形容詞…大きい、高い、強い、深い、濃い、多

い、重い、大(ダ)、濃厚(ダ)

「小」形容詞…小さい、低い、弱い、浅い、薄い、少ない、軽い、小(ダ)、希薄(ダ)

以下、「可能性|が・は・も・の|形容詞」の意味で「可能性・形容詞」という表記を用いる（例：可能性・大きい。この「大きい」は(5)の条件に合致した全活用形を代表する）。

表1を考慮し、3節での分析は、用例数の多い「高い、強い、大きい」の3語を主に扱う。ただし、それ以外の語についても、分析によっては、比較のため数値を示すことがある。

2. 先行研究について

本稿の主題に直接関連した先行研究に秋元(1999)がある。秋元論文は新聞記事、新潮文庫等のデータを利用して「密度、比重、公算、確率、可能性」の各名詞と、その度合いの大きさを表す形容詞との組合せの頻度の調査を行い考察を加えたもので先見性がある。

秋元は、「可能性|高い/強い/大きい|」には使い分けがあるといい、(当該事態の成立に対する)「確信度」の高低によって(高い方から)「可能性|強い・高い・大きい|」が用いられるという。秋元は、この説を裏付ける例文を2組示しているが、率直なところ、単に仮説に合致する関係にある例の組を探し出して示しただけのように思われ説得力に欠ける。例えば(1)~(4)の例だけを根拠にするなら、3つの形容詞の間に何の相違もないという主張も行えるのである。用例全体にわたる傾向の存在を裏付けるためには定量的な方法が必要であるが、「確信度」のような概念を一次的な指標にすることは難しそうである。

本稿では、他者にも追試可能な計量的方法をいくつか用いて、3形容詞の使い分けに関連する可能性のある要因を探ろうとする。

3. 前後文脈の分析

「可能性・形容詞」の前後の文脈に出現する表現に注目し、形容詞による相違を探る。

3.1 頻出 n-gram の分析

まず、「可能性」の直前に頻出する n-gram を述語形容詞別に比較する。n-gram とは、n 個の語（ここでは短単

表1 「可能性・形容詞」の用例数

	用例数		用例数
高い	47,079	低い	5,215
強い	12,544	弱い	2
大きい	5,295	小さい	978
濃厚	595	希薄	1
大	171		
濃い	115	薄い	858
多い	31	少ない	2,136
深い	1		

位要素³⁾の接続である。その中で最も前文脈の傾向が明瞭なように思われた3-gramについて、形容詞別に、前文脈に頻出するものをあげると表2～表4のようになる(句点をまたがないもののみ示している)。数値は当該3-gramの生起数と、全3-gram中での比率(千分率)を表している。形容詞は、終止形だけでなく(5)の条件を満たす諸活用形を区別せず含んだものである⁴⁾。

表2～表4に現れる3-gramを末尾とする連体修飾部の表す事柄には、「巻き込まれた」「(同)一犯の」のように基準時に(その内容が成立するかどうか)すでに確定しているものと、「無投票の」「に発展する」のように基準時にはまだ確定していないものがある(どちらも決められないものもある)。3つの形容詞を比較すると、「高く強く大きい」の順に、成立が未確定のことを表す表現が「可能性」に先行することが多くなるようである。この点は、次節の分析とも一致する。しかし、これはあくまで程度の差であって、例えば、「巻き込まれた可能性」や「感染した可能性」のように明白に過去の事態について「大きい」を用いる例も相当数あることが表から分かる。

次に、「可能性・形容詞」の後続文脈に頻出する3-gram

表3 「可能性・強い」の前文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
て	い	た	471	45.35
さ	れ	た	218	20.99
し	て	いる	175	16.85
巻き込ま	れ	た	107	10.30
の	犯行	の	98	9.44
れ	て	いる	76	7.32
よる	犯行	の	61	5.87
使わ	れ	た	55	5.30
一	犯	の	50	4.82
が	あつ	た	48	4.62
に	なつ	た	36	3.47
を	図つ	た	33	3.18
が	行わ	れる	32	3.08
自殺	し	た	29	2.79
は	自殺	の	25	2.41
こと	に	なる	24	2.31
に	発展	する	24	2.31
感染	し	た	24	2.31
出	て	くる	23	2.22
殺さ	れ	た	23	2.22

表2 「可能性・高い」の前文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
て	い	た	1,597	39.82
さ	れ	た	1,070	26.68
し	て	いる	660	16.46
一	犯	の	398	9.93
は	自殺	の	298	7.43
れ	て	いる	280	6.98
巻き込ま	れ	た	246	6.14
が	あつ	た	220	5.49
よる	犯行	の	209	5.21
転落	し	た	197	4.91
、	自殺	の	185	4.61
使わ	れ	た	177	4.41
感染	し	た	175	4.36
を	図つ	た	172	4.29
の	犯行	の	152	3.79
自殺	し	た	147	3.67
に	なつ	た	141	3.52
出火	し	た	124	3.09
死亡	し	た	117	2.92
関与	し	た	112	2.79

表4 「可能性・大きい」の前文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
て	い	た	68	16.44
し	て	いる	52	12.57
さ	れ	た	35	8.46
れ	て	いる	28	6.77
無	投票	の	16	3.87
転落	し	た	15	3.63
出	て	くる	15	3.63
を	迫ら	れる	14	3.39
こと	に	なる	14	3.39
に	発展	する	13	3.14
巻き込ま	れ	た	12	2.90
投票	と	なる	12	2.90
採択	さ	れる	11	2.66
が	行わ	れる	11	2.66
平年	並み	の	11	2.66
し	て	いく	10	2.42
に	追い込ま	れる	10	2.42
感染	し	た	10	2.42
使わ	れ	た	10	2.42
影響	を	与える	10	2.42

を形容詞別に示す。表5～表7を比較すると、形容詞によって多少頻出 n-gram の順位に入れ替わりはあるものの、全体として後続文脈の傾向に明白な相違を見出すのは難しいようである。

3.2 補部述語の種別（スル形／シタ形）に注目した分析

調査対象を、動詞で終わる節を補部とする用例に限定し

表5 「可能性・高い」の後文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
と	み	て	7,012	245.31
と	いう	。	2,661	93.09
と	見	て	1,167	40.83
」	と	し	1,005	35.16
と	し	て	965	33.76
と	み	られる	484	16.93
」	と	指摘	357	12.49
こと	が	、	353	12.35
と	判断	し	336	11.76
」	と	の	322	11.27
と	判断	。	309	10.81
」	と	話し	270	9.45
と	み	られ	261	9.13
と	の	見	250	8.75
こと	が	分かっ	220	7.70

表6 「可能性・強い」の後文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
と	み	て	1,787	291.00
と	いう	。	401	65.30
と	見	て	332	54.06
と	し	て	280	45.60
」	と	し	155	25.24
と	み	られる	109	17.75
」	と	の	93	15.14
こと	が	、	79	12.86
と	み	られ	76	12.38
と	の	見	70	11.40
と	判断	。	59	9.61
こと	を	示唆	59	9.61
と	判断	し	57	9.28
」	と	話し	53	8.63
」	と	述べ	51	8.31

て、その動詞がスル形（基本形）かシタ形（過去形）かの比率を主文述語の形容詞別に眺める。ここでの動詞には使役・受け身などの形も含むが否定形は含まない。参考のため、「高い、強い、大きい」以外の大値形容詞と小値形容詞も含め、図1・図2に示しておく。「～といった可能性」「そういう可能性」のような形式化した表現を含む例は除外している。

図1を見ると、「高い」「強い」に比べ「大きい」では補部のシタ形比率が低いことがわかる（「高い」「強い」の間にも小差がある）。スル形・シタ形の選択は、基準時と事態実現時との前後関係に完全には対応しないが相関はする。基準時より過去の事態の可能性を問う場合は「大きい」は（他の形容詞に比べて）やや用いられにくい、とは言えそうである。しかしこれも傾向にすぎず、明白に過去の事態について「大きい」を用いる例も相当数あることは前節で述べたとおりであるし、基準時以降のことを問題にする場合でも、実数としては「大きい」より「高い」の方がずっと多いのである。

参考のため小値の語の場合を示すと、形容詞間の相違は比較的小さいが、「低い」ではシタ形の比率が多めであることなどがわかる。

3.3 通時的比較（補説）

ここで少し通時論に立ち入る。国会会議録を用い、「可能性」に先行する節の述語がル形、タ形の例の数を求める

表7 「可能性・大きい」の後文脈に頻出する要素列

			生起数	比率
と	み	て	242	115.79
と	いう	。	146	69.86
」	と	し	63	30.14
と	し	て	62	29.67
と	の	見	37	17.70
」	と	述べ	36	17.23
と	見	て	35	16.75
」	と	指摘	32	15.31
と	み	られ	30	14.35
」	と	の	30	14.35
から	だ	。	26	12.44
と	み	られる	26	12.44
」	と	、	24	11.48
」	と	いう	24	11.48
」	と	話し	21	10.05

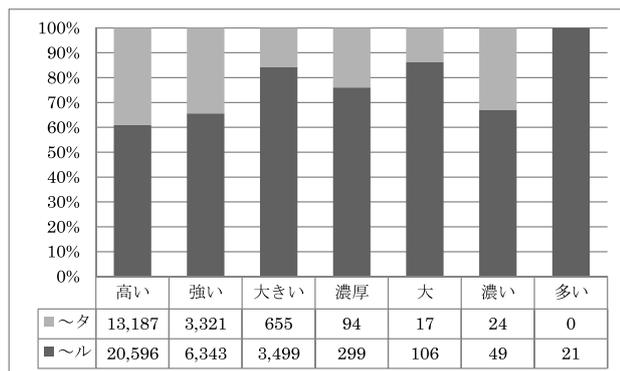


図1 「～スル可能性・形容詞」と「～シタ可能性・形容詞」の比率（大値形容詞）

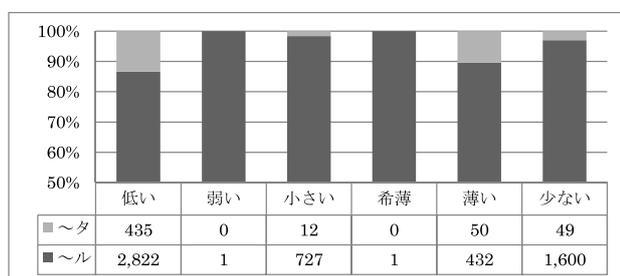


図2 「～スル可能性・形容詞」と「～シタ可能性・形容詞」の比率（小値形容詞）

と図3のようになった。ここでは、主文述語が大小を表す形容詞の場合に限らず「可能性」の全用例を問題にしている。前節同様、形式化した表現などは除いているが、その処理が完全でなく一部ゴミを含む可能性がある。

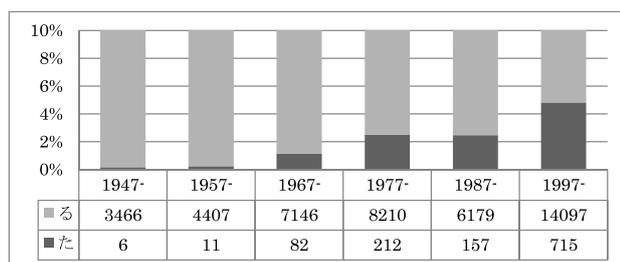


図3 「～スル可能性」と「～シタ可能性」の比率の推移

図3を見ると、1947年から1966年までの時期では「～シタ可能性」の用例がほとんどなくその後に比率が漸増したことが分かる。「可能性」という名詞そのものにも一定の用法変化があった可能性を示唆する結果である。ただ、「～シタ可能性」の例の比率は、最後の時期でも、5%程度にすぎない。

3.4 比較形式「～の方が」に注目した分析

次に、「～可能性の方が～」のように、比較形式「方が」を含んだ形の例の数を問題にする。上記に該当する例の数をA、表1に示した数をBとし、 $A/(A+B)$ という比率を、形容詞別に求めたのが表8である。値は千分率である。

表8 「方が」の有無

	A	B	$A/(A+B)$
大きい	42	5311	7.8
強い	26	12549	2.1
高い	79	47259	1.7

これを見ると、「高い、強い」に比べ「大きい」で当該比率が高いことが分かる。つまり、「大きい」では、他の2つの形容詞の場合より、他の事態との比較上の大きさを述べるものがやや多いということになる。しかし、これもあくまで傾向に過ぎない。

3.5 程度副詞「非常に」などに注目した分析

次に、「～可能性が非常に～」のように、大きな程度を表す程度副詞「非常に、極めて、相当、かなり」を含む例の数を問題にする（「甚だ」などは用例がなかった）。それらの用例数をA、表1に示した数をBとし、 $A/(A+B)$ という比率を形容詞別に求めたのが表9・表10である。数値は千分率である。

これを見ると、全体に小値の形容詞の方が大値の形容詞より高程度の程度副詞を伴う率が高いこと、「濃い、低い、小さい」で比較的その率が高いことが分かる。しかし、「高い、強い、大きい」の間の相違は、相対的には小さい。

例えば「可能性」以外の「○○性」の形の語では、それぞれ、大値・小値形容詞のうちどちらの方が高程度の程度副詞をよく伴うかは興味深い問題であるが、今後の課題とする。

表9 程度副詞の有無（大値形容詞）

	非常に	極めて	相当	かなり	合計 (A)	B	A/(A+B)
高い	199	1137	13	98	1447	47259	3.0
強い	20	221	1	4	246	12549	1.9
大きい	24	106	3	11	144	5311	2.6
濃厚	0	26	0	1	27	595	4.3
大	0	6	0	0	6	171	3.4
濃い	0	17	0	1	18	115	13.5

表10 程度副詞の有無（小値形容詞）

	非常に	極めて	相当	かなり	合計 (A)	B	A/(A+B)
低い	65	839	8	44	956	5292	15.3
小さい	29	154	0	7	190	983	16.2
薄い	5	87	0	2	94	871	9.7
少ない	21	155	0	1	177	2142	7.6

4. まとめ

本稿では、「可能性が[高い/強い/大きい]」の用例を、その前後文脈に注目したいくつかの計量的手法によって分析した。その結果、特に「大きい」と他の2つの形容詞の間には、連体修飾部のタ形・ル形比率や「可能性」の後に「の方が」を伴う率などに若干の相違が認められた。しかし、それらは傾向にすぎず、「ある条件に当てはまる環境では、形容詞Aが（ほとんど）用いられないが形容詞Bは用いられる」という明確な使い分けは見いだせなかった。さらに言えば、日本語学習者用の教材や類義語辞典などに記載すべきほどの使用傾向の違いがあるようにも筆者には思えない。要するに実際の観点からは問題にならない程度の相違と思われる。

5. 補論：「可能性」の多義性の問題

5.1

「可能性」という名詞そのものに多義性を認める必要があるかどうか。また、認めるとすれば、どれだけのレベル・種類の多義性を認めるべきか。これらの間に確かな答を得ていないが、「可能性」の用例の中に2つの類型を認めることは一応可能である⁵。

しかし、結論を先に述べると、筆者が分析対象としている形容詞を述語とする例はほとんどが一つの類型（下記のA）に収まるため、類型の区別を考慮しなくても、形容詞

別の使用傾向の統計的分析には大きく影響しないと思われる。以下に簡単に論じておく。

A 事態の成立の見込みを問題にするもの

事態の成立の見込みという量的属性を表すものである。その存否（0かどうか）を問題にすることもあり、大きさ（0%から100%まで）を問題にすることもある。よく共起する主文述語は本稿で扱う量的形容詞のほか、量的増減の述語、存否・出現消滅の述語、存在を知らせたり認めたりする述語（例：「(～を)指摘する、示唆する、示す、否定する」）などである。

このタイプでは、(6)のように、命題を表す修飾節を伴うのが基本的パターンである。しかし、(11)のように命題を指示詞で指す場合や、(12)のように命題が文脈から理解されることなどもある。節の形をとる場合はいわゆる外の関係の連体修飾構造を構成する⁶。間に「という」や「と思われる」などが介在することもある。

～スル可能性

(6) 北朝鮮側が本会談の席で再び亡命問題を提起する可能性もある。(毎日99/01/02)

(7) 荷受人が海外にいることなどから、犯行グループ内に外国人がいる可能性が高いと判断。

(毎日99/09/11)

～シタ可能性

(8) 自宅も車も所持品も荒らされておらず、殺害目的で

待ち伏せした可能性が濃厚だ。(朝日96.5.12)

～ノ可能性

(9) 同署は身元の確認を急ぐとともに、殺人事件の [=ソレハ殺人事件デアル] 可能性もあるとみて死因などを調べている。(読売06/12/29)

(10) 男のロマンと違い、女の夢は具体的な分、実現の [=夢ガ実現スル] 可能性は高いといえよう。(読売03/06/25)

ソノ可能性

(11) その [=事故ガ起コル] 可能性は大いにある。(朝日93/03/02)

φ可能性

(12) (最多勝について問われて) [=最多勝ヲスル] 可能性はありますね。(読売05/09/10)

以上のような例の変形として、(13)のように「Xは可能性が～」の形の文があり、(14)のように分裂文のような形をしたものもある。

(13) 雲仙対策を名目とした召集は可能性が低い。(毎日91/6/24)

(14) [メダル獲得ノ] 可能性が高いのはフリースタイルスキー、スノーボード、スケートなど。(毎日05/8/10)

まれであるが、(15)のように命題を表す節の後に程度を表す形容詞があることがある。

(15) 不法投棄を行っている高い可能性がある、という認識をして、可能な限り事実把握に努めるべきだったのに、【略】(読売03/03/18)

Aタイプの「可能性」の類義語に「確率」や「公算」があるが、それらでは「～|確率/公算|がある/ない」のように有無を問題にすることはあまりない。また「公算」は基本的には基準時点以降の事態に関する語である。

B 可能的事態を表すもの

基準時から将来に向かって分岐し現実化していくさまざまな可能的事態を指すものである。典型的な用例では、望ましい方向に向かう可能的事態を指す。また、人などが現に所有しているものとして捉えられることもある。よく現れる主文述語は「(～を) 探る」⁷「(～を) 秘める」「(～が)

広がる」などである。(20)の「可能性が広がる」の場合のように可能な展開の幅として捉えることもある。

(16) そこで感じることは、人間の可能性って無限だなあということです。(毎日95/02/16)

(17) 宇土市の宇土高校では、福嶋秀一校長が「今後も目標を持って可能性に挑戦し複雑な社会を生き抜いてほしい」と式辞。(読売07/03/02)

(18) 市民グループ【略】は一月十三日、設立十周年を記念し、子どもの持つ可能性を探るイベント「子どもパワーさまざまフェスタ」を新潟市音楽文化会館で開く。(読売02/04/06)

(19) 可能性を持って余し、都市を漂う若者。2007年の中では、今もどこかにかに存在するののか。(読売07/04/17)

(20) 「通信制なら仕事との両立もでき、可能性が広がる」と話す。(毎日99/08/10)

なお、実際にはどちらの類型の典型からも外れた例もあり、類型の判定しにくい例もあって、なお検討すべき点が残るが今立ち入らない。

5.2

本稿で扱った形容詞を述語とする例では「可能性」はほとんどがAタイプである。

ただ、例外として以下のようなものがある。これらはBタイプに近いように感じられるが、「可能性」を「発展の可能性」などと解釈すればAタイプとみなせないこともない。

(21) 「横浜は可能性が大きい都市。こういうところで働けるのは光栄」と述べた。(読売07/03/21)

(22) 並立制から逃れようという論理よりも、その中で生きる道を探すほうが将来の可能性は大きい(朝日93/09/30)

このような例の述語は、(21) (22)のように「大きい」であることがほとんどで他の形容詞はまれである⁸。ただし、「可能性+大きい」の全用例中、この種のものの比率はたかだか1%である。

形容詞によってA・Bタイプの比率が異なるのであれば、本来はその区別を行った上で述語形容詞別の統計分析を行うべきであるかもしれないが、名詞「可能性」の場合に

限って言えば、その区別をしなくても結果に大きな影響はないと思われる。

注

- 1 「大(ダ)」のように狭義の形容詞でないものも含むが、便宜上形容詞と呼ぶ。また当該集合のどれかの要素という意味では、斜体で示す。
- 2 直前字種の条件により、複合的な名詞はほとんど排除されるが「破たん可能性」のようなものがごく少数残る。反対に、「大変可能性が高い」のようなものを(少数ではあるが)不当に除外していることになる。また、連用中止で後が漢字の例(「可能性が大きく危険」など)を除外している。
- 3 短単位についての詳細は国立国語研究所(2011)を見られたい。
- 4 「一犯」は、「同一犯」を unidic・mecab が誤分割したものの断片であるがそのままにする。
- 5 「可能性がある」という表現に関しては森山(2002)の研究があるが、「可能性」という語の用法全体を問題にしていない。また、大島(2010)が、「そのことがらが成立することがどの程度確実なものといえるか、その度合い」との意味記述に基づき、「可能性」の前に「という」が挿入される現象とその理由などを考察していて興味深い。やはり、用法全体を問題にしていない。
- 6 もっとも、下記の例のように「可能性」がテ格で出現することもあるので、修飾節内に「ソノ可能性デ」のようなテ格を想定すること(つまり内の関係とみなすこと)が不可能なわけではない。このようなことは、外の関係-内の関係という区別一般に内在する難点と思われる。
 - ・近年の研究では、首都圏を襲う大規模地震は近い将来、高い可能性で起きるとされる。

(読売06/01/01)
- 7 「探る」などに関しては、Aタイプと解しうる例もある。例えば下記は、共同研究として可能な展開を種々探るということならばBタイプだが、共同研究が可能か否かを探るという意味ならばAタイプである。
 - ・原子炉科学研究所(RIAR)に技術者五人を派遣することを決めた。共同研究の可能性を探る目的で、昨年十一月の日口首脳会談で合意された「橋本・エ

リツイン・プラン」に基づく原子力協力の一環。

(朝日98/5/11)

- 8 「高い」「多い」を用いた例に次のようなものがある。これらはタイプの判定が難しい。
 - ・東南アジアでは、食習慣の違いから思うように業績が伸びず、市場としての可能性が高いオーストラリアに積極展開する方針に切り替えた。

(朝日90/4/1)

- ・「土地に余裕があり、通勤時間が短く、物価も安い。将来的な可能性が多く、お付き合いを深めたい」と話した。(朝日93/10/13)
- 「多い」の例の中には次のようなものもあり、これはAタイプとは解釈できないことが明らかだが、望ましい可能的事態を指すのではない点で典型的なBタイプとも異なる。「可能性」を可算な対象として扱っているようである。
 - ・【フランスでは】子供が生まれるとまず目と髪の色を尋ねるそうで、親の目や髪からは、可能性が多すぎてほとんど予測できないらしい。(朝日94/4/24)

「多い」に関しては、表1に示したように、それを述語とする例自体が少ないため、その中の比率で言えばAタイプとするに問題のある例の率は無視できるほど低いとは言えない。しかし、それは現代の新聞で言えることで、服部(2011a)で例を示したように、かつて「可能性が多い」が盛んに用いられた時期にはAタイプのように見える例が大部分だったのである。

参考文献

- 秋元美晴(1999)「程度名詞と形容詞の連語性」『日本語教育』102:20-29.
- 大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
- 国立国語研究所(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス利用の手引』第1.0版
- 服部匡(2011a)「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係——通時的的研究——」『言語研究』140号, 89-116.
- 服部匡(2012b)「名詞と尺度的形容詞類の共起頻度の推移——国会会議録のデータから——」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』12号, 1-11.
- 服部匡(2011c)「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移——国会会議録のデータから——」『同志社女子大

学学術研究年報』62号, 113-141.

服部匡 (2012a) 「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移(2) — 国会会議録のデータから —」『同志社女子大学学術研究年報』63号, 47-72.

服部匡 (2012b) 「反義関係に基づいた尺度的形容詞と名詞の共起傾向の分析 — 国会会議録のデータから —」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』30巻, 104-120.

森山卓郎 (2002) 「可能性とその周辺 — 「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」 —」『日本語学』21巻2号, 17-27.

付 記

本研究は、学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)「有無・量的大小・増減・出現消滅の述語の総合的研究」、課題番号23520479）および、国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」による研究成果の一部である。

